

青年期女性の人生観および人生観獲得までのプロセス : TEMとTAEによる分析

浦田, 優子

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

94

(開始ページ / Start Page)

100

(終了ページ / End Page)

114

(発行年 / Year)

2025-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00031207>

青年期女性の人生観および人生観獲得までのプロセス —TEM と TAE による分析—

人間社会研究科 人間福祉専攻

博士後期課程 3 年 浦田 優子

【抄録】

本稿は青年期の女性がどのような人生観を持ち、その人生観を得るまでにどのようなプロセスを経ているのかを明らかにしようと試みたものである。複線経路等至性モデル (TEM) を用いて分析を行った結果、人生観の獲得までのプロセスは①第 1 期：母親の価値観を内在化している時期、②第 2 期：自分の価値観を考える時期、③第 3 期：他者との関係性の中で価値観の葛藤が起きる時期、④第 4 期：何のために生きているのかを考える時期、⑤第 5 期：アイデンティティを確立しながら自分の社会的な居場所を新たに見つける時期の 5 つに分類された。また TAE を用いてどのような人生観を持っているのかを分析した結果、①誰かに必要とされるということ、②自分に課される役割があるという意識、③人間は互いに意味付けし合いながら生きていてその人にしか知り得ない物語があるという死生観が「人生に意味があるといいな」という人生観に含まれていることが明らかとなった。これらのことから、ポジティブな人生観を得るためには、他者との関係性の中で自己を捉え、自分自身の役割を意識しながら、他者と互いに意味付けし合いながら生きているという感覚を持つことが重要であるということが示唆された。

【キーワード】

複線経路等至性モデル (TEM) TAE (Thinking At the Edge) 人生の意味

I. 問題と目的

「人生の意味」に関する研究は心理学の領域にとどまらず、神学や哲学など学際的に研究が行われている。その中で、「人生の意味」に関して理論化した人物に V.E. フランクルがいる。フランクルは、人生に意味を見いだそうとする努力を人間の根源的な力であるとして「意味への意志」と呼び、この「意味への意志」が充たされないときに体験される「内的空虚の体験、根源的な意味喪失の感情 (Frankl, 1972 山田 (監訳) 2002, p. 211)」を実存的空虚あるいは実存的欲求不満と呼んだ。そして、フランクルはこの「実存的空虚」と呼ばれる人生の無意味感に対する精神的支援法としてロゴセラピーを確立し、ロゴセラピーの思想を理論化している。

実存的空虚の実証的研究においては、「人生目的テスト」(The Purpose-in-Life Test, PIL test. 以下、PIL と表記する。) が活用されてきたところであり、日本でも PIL を用いた研究が進められてきた。そもそも、フランクルは、実存的欲求不満は神経症を生じさせると考えており、このような神経症を「精神因性神経症 (noogene Neurose) と名付け、普通の神経症である心因性神経症とは区別している (Frankl, 2010 広岡訳 2015)。そして、クランボーはこの精神因性の神経症を普通の神経症から区別するために PIL を開発した (Frankl, 1988 広岡訳 2015)。PIL は、質問紙である Part-A、文章完成法の Part-B、自由記述の Part-C から成り、邦訳版では Part-B と Part-C の数量化が行われている (佐藤 (監), 1998)。日本における PIL を用いた研究の例として、たとえば高井 (2000) の研究では、その人なりに自分の人生に「意味や目的」を見出せていることや、「自己課題的」な生き方態度が「死への心の準備」へと通じる要因になっていることが明らかとなっている。また日本では「人生の意味」に近接した「生きがい」という概念を用いて、独自の研究が進められている。神谷 (1966) は生きがいの対象を、生存充実感への欲求をみたすもの、変化と成長への欲求をみたすもの、未来への欲求をみたすもの、反響への欲求をみたすもの、自由への欲求をみたすもの、自己実現への欲求をみたすもの、意味への欲求をみたすものの 7 つに分類している。この 7 つに分類された欲求について、熊野 (2003) は PIL の Part-A の項目にどの程度該当するかを検討している。その結果、「PIL で測定されるものが、生きがいの最も重要な要素を構成している可能性が高い (熊野, 2003, p. 69)」と結論付けている。

そして、人生の意味を感じられない状態や生きがいを失っている状態は、不安や抑うつなどさまざまな心理的な問題へと発展する可能性がある。そのなかでも青年期は浦田（2013）が指摘するように、スチューデント・アパシーの背景に自己の存在の意味を問うような実存的な問題があると指摘されている（笠原，1984）など、人生の意味に関する深刻な心理的問題を抱えている可能性が考えられる。先行研究においても PIL を用いて大学生のひきこもり傾向と人生の意味・目的意識との関係が調査された結果、大学生が自らの人生に主体的に関わり、人生の意味や目的を見出していくことがひきこもりの予防につながるという示唆が得られている（草野，2012）。さらに、人生の価値の懷疑や人生の目的への問いがアイデンティティと関連があり、青年の日常生活と関わりがある問いであると考えられている（亀田，2015）。このことから、青年期は人生の意味への問いが深刻な問題となることが予想される。

そこで、本研究では、青年期を対象にどのような人生観を持ち、その人生観を得るまでのプロセスはどのようなものであったかを明らかにすることを目的に研究を行った。従前の研究では、確かに人生の意味を見出す要因に関して検討が進められていたものの、人生の意味を含めた人生観を見出すまでのプロセスは明らかとなっていなかった。本研究は、かかる欠缺に対してインタビュー調査を行い、人生観を得るまでのプロセスおよびその人生観の具体的文脈を明らかにする。

II. 方法

1. 調査協力者

調査協力者の選定にあたり①青年期にあたる年齢であること、②研究者とこれまでに人生に関する話をしたことがあり、③人生観について話することに抵抗がなく、④現時点でカウンセリングを受けていないということに基づき研究者との間にある程度のラポールが成立している対象者に依頼することとした。そして、機縁法により 26 歳女性の A さんに本研究の調査協力を依頼した。

2. 実施時期

2023 年 12 月から 2024 年 9 月にかけて計 3 回のインタビュー調査を行った。

3. 分析方法

分析方法には複線経路等至性モデル（Trajectory Equifinality Model : TEM）および TAE（Thinking At the Edge）を採用した。

TEM は、時間を捨象せずに人生の理解を可能にしようとする文化心理学の方法であり、構造（ストラクチャー）ではなく、過程（プロセス）を理解しようとするアプローチである（安田ら，2012）。この方法論は人間の行動や心の変容を、時間軸を維持しながら社会的文脈との相互作用とともに可視化できるという強みをもっている（池田ら，2018）。塩満（2002）は、「研究手法として TEM は、ある意思決定に至るまでのプロセスを構造化することを目的とする研究に適した分析手法である（p. 67）」と述べている。本研究では、人生観を得るまでのプロセスを明らかにすることを目的とした研究であるため、TEM が適していると考え採用した。

また TAE は、現象学の流れを汲む哲学者であり心理臨床家であるユージン・ジェンドリンが、夫人のメアリー・ヘンドリクスと共同開発した分析方法である（得丸，2010）。そして TAE は「うまく言葉にできないけれども重要だと感じられる身体感覚を、言語シンボルと相互作用させながら精緻化し、新しい意味と言語表現を生み出していく系統だった方法（得丸，2010，p. 5）」とされている。人生の意味とは言語化が難しい抽象的な概念である。語りの中にある十分に言葉にされていないが重要である身体感覚を精緻化していくことによって、抽象度の高い人生の意味という概念を客観的に分析できると考え、今回の分析方法として採用した。

4. 分析手順

インタビューガイドを作成し、半構造化面接を実施した。インタビューガイドの項目は下記のとおりであった（Table 1）。

Table1 インタビューガイド	
カテゴリー	質問内容
基本情報	・年齢、性別、職業を教えてください。
社会的な活動への参加の有無	・仕事やアルバイト、ボランティア活動など何か社会的な活動に参加されていますか？ —それらの活動に参加することに何か意味があると思いますか？
充実感・満足感に関する質問	・何か夢中になれることはありますか？ ・どのような1日を過ごした日に充実感や満足感を感じますか？ ・充実した1日を過ごすために心がけていることはありますか？ —その心がけは人生を意味あるものになっていますか？
人生の意味に関する質問	・「人生の意味」という言葉を聞いたときにどのようなことをイメージしますか？ ・あなたが「人生の意味」という言葉を使うとしたら、それはどのような意味合いで使いますか？ ・これまでに「人生の意味」を考えたことはありますか？ —それはどのようなときでしょうか？ —何回くらい考えたことがありますか？ —そのときに誰かとその考えを共有しましたか？ —考える前後で何か変化はありましたか？ —人生に意味はあると思いますか？ ・これまでにご自身の人生観が変わるような出来事がありましたか？ —いつの出来事でしょうか？ —どのような出来事でしたか？ —その出来事の前後でどのような考え方の変化がありましたか？ ・私たちは明日生きているのかも分からないのに今日という日を生きています。それにどのような意味があると思いますか？ ・あなたが人生をまっとうすることにどのような意味があると思いますか？ ・人生の中で辛いこと、乗り越えなければいけないこともあると思いますが、そのようなときにどのように対処していますか？ ・世の中には不平等なことや不条理なことも多く存在していると思います。例えば裕福な人もいれば貧しい人もいますし、幼くして命を落とす人もいれば長生きをする人もいます。何の落ち度もないのに事故や事件に巻き込まれてしまうこともあります。そのように条件が異なる中で人が生きていくことにどのような意味があると思いますか？
その他	・インタビューを振り返って、質問に関連してお話になりたいことがあれば、ご自由にお話下さい。 ・以上のインタビュー全体を通して、お感じになったことがあればお聞かせください。

研究者と研究協力者との間で齟齬が生じないようにするために次のような手順を踏んだ。まず 1 回目のインタビューで上記の項目に沿って質問した。インタビュー時間は 1 時間 3 分 20 秒であった。インタビューで得られた音声データから逐語記録を作成し、逐語記録から意味のまとまりごとに分類し、時系列に並べ TEM 図を作成した。次に 2 回目のインタビューでは、作成した TEM 図をもとに修正点や補足点がないかを中心に聞き取りを行った。インタビュー時間は 1 時間 28 分 22 秒であった。2 回目のインタビューで得られた音声データをもとに逐語記録を作成し、TEM 図の修正を行った。そして、3 回目のインタビューで作成した TEM 図に誤りがないかを確認した。最後のインタビュー時間は 29 分 48 秒であった。

3 回目のインタビュー結果も逐語記録し、すべてのインタビューで得られた音声データと逐語記録を用いて TAE で分析を行った。

5. 倫理的配慮

本研究は、法政大学大学院人間社会研究科研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：230102_2号）。

研究協力者に対して、研究協力の自由意思、拒否権、プライバシーの遵守、IC レコーダーで録音すること、データの破棄について口頭及び書面で説明し、文書によって同意を得た。

III. TEM による分析

Table2 に TEM における主要概念について上川（2023）を参考にまとめ、本研究における位置づけを整理した。

Table2 複線経路等至性モデル (TEM) の主要概念

用語	用語の意味	本研究の位置づけ
等至点：EFP	研究目的に基づき、ある行動や選択を焦点化するポイントのこと。	本研究では、青年期にいる調査協力者が、現在の「人生の意味」に関する価値観を見出している状態を指す。
両極化した等至点：P-EFP	等至点（EFP）とは価値的に背反したり、EFPの補集合となるような行動や選択を捉えたりするポイントのこと。	本研究では、調査協力者が現在の「人生の意味」に関する価値観を見出さない状態を指す。
分岐点：BFP	文化的・社会的な制約と可能性の下で実現される意思や葛藤・迷いを含む個別多様な歩みを複数に分かつポイントのこと。	本研究では、「人生の意味」に関する価値観を見出すことにつながる岐路になる事柄を指す。
必須通過点：OPP	等至点（EFP）を経験した人のうち「通常ほとんどの人」がある状況に至るうえで必ず通るもの、また制度・法律・慣習など文化的・社会的・現実的な制約の有り様とそれをもたらす諸力をみつける手掛かりになるポイントのこと。	本研究では、青年期にいる人たちの多くが「人生の意味」に関する価値観を得るまでの期間、その価値観を得るまでに通過すると考えられる経験を指す。
社会的方向づけ：SD	等至点（EFP）に向かう個人の行動や選択に制約的・阻害的な影響を及ぼす力を象徴的に表した諸力のこと。	本研究では、「人生の意味」に関する価値観を得ることを阻害する社会的・文化的諸力の総体を指す。
社会的ガイド：SG	等至点（EFP）に向かう有り様を促したり助けたりする力を象徴的に表した諸力のこと。	本研究では、「人生の意味」に関する価値観を得ることを促進する社会的・文化的諸力の総体を指す。

注1) TEM=Trajectory Equifinality Modeling; EFP=Equifinality Point; P-EFP=Polarized EFP; OPP=Obligatory Passage Point; BFP=Bifurcation Point; SD=Social Direction; SG=Social Guidance

(1) 結果

インタビューにより、Aさんは「人生の意味」について「人生の意味があるといいな」と思っているということが明らかとなった。そこで、「人生の意味があるといいな」という人生観（人生の意味感）を獲得するまでのプロセスを明らかにするためにAさんの質的データをTEMで分析し、TEM図とストーリーラインを作成した。Figure1が作成したTEM図である。その結果、Aさんは次のような出来事を経験する中で人生観を獲得していることが明らかとなった。

幼少期の A さんは絵を描くことが好きな子どもで、夢中になって絵を描いていた。この夢中になって絵を描くという体験は、「自分は夢中になることができる人間だ」という自信に繋がり、人生を模索する下支えになっていた。また幼い頃の母親を内在化し、お礼を言わない相手にお礼の言葉を求めるというように、ルールに対して厳格な態度をとっていた。同時に怒られたくないという気持ちが強く、怒られないようにしようと行動していた。そのような A さんは中学に入学し、宿題をしてこなかったり、遅刻をしてきたりといったルールを守らない同級生を目の当たりにして、その行動を自由だと解釈するようになる。この頃の A さんは、内在化した母親の価値観に合わない行動に対してポジティブな意味付けをしようとしている。しかし、父親と祖母との死別を体験し、命には限界があるのだということをありありと認識し、人として従うべきことから目を背けてはいけないという考えに至る。ここで死別という一般的にネガティブイベントとされる出来事が、A さんの価値観形成には社会的ガイドとして機能していた。このような考えを持った A さんは、高校に進学するといじめを目撃する。いじめに対して「やめなよ」という言葉をかけることができない自分に気づき、人としてちゃんとすべきだと思うようになる。しかし、そう思うようになった矢先、教師たちから不謹慎な発言や生徒を下に見るような発言がなされたりすることがあり、複数の教師に対して不信感を抱くようになる。そして、それは「この空間にいることが辛い」という気持ちに発展する。出席日数が足りなくなる中で、担任の先生や母親からのサポートを受けつつも、「自分の気持ちを説明する言葉がない」という感覚があった。この頃の A さんは自分の信念に反する言動をする大人に対して憤りを感じつつも、その感情を表現する術がなく、葛藤していた。卒業後の進路は、絵が好きだったことから美大に進学したいと思うようになる。美術の先生から絵を通して気持ちを理解してもらうという体験をしつつも、展示会で他校の先生たちが絵の技術しか評価していなかったことから「本当に美術をやりたいのか？」と疑問に思うようになる。絵の上手さで人を判断する自分に辟易する気持ちが無視できないくらいに大きくなり、美大に進みたい気持ちがなくなり、高校卒業を迎えた。高校卒業後は A さんにとって「何のために生きているのかを考える」時期となる。予備校に通い、アルバイトをしつつも上手いかないという感覚があった。そのような中で小学校から中学校のときにお世話になった先生から塾のアルバイトに誘われるという、ターニングポイントとなる出来事が起こる。「声をかけてもらったのでこれは頑張って続けよう」と思い、塾生と向き合っていく日々を送る。挨拶が出来ない、宿題を忘れてしまうといった塾生たちに「このまま野放しにしたら大変なことになる」という気持ちを抱く。塾生との関わりのなかで「自分はここにいなきゃいけないかも」という思いになっていく。そして、塾生との関わりを通して「必要としてもらえることってありがたい」という価値観を形成していく。そして、塾生たちが必死に勉強する流れに乗っかるようにして、自身も大学を受験し、合格する。このような体験によって「選択肢は広い」という感覚が醸成されていった。大学進学後は複数のアルバイトに挑戦する。子どもと関わる仕事では、気が合わない同僚もいたが、子どもと過ごす時間が大事だと感じる、人と関わりがあることで発見があると思うようになる。学校に行きたくないと言う子どもたちを通して、「自分が嫌だと思うことを共有し合えると関係が広がっていく」のではないかと考えるを持つようになる。この頃の A さんは自分と価値観が合わない人がいる環境でも、心の中で折り合いをつけ、新しい学びを得ている。また、大学の講義や研究を通して、その人にしかできないことがあると思うようになり、自分にしかできないことを考えるようになる。大学卒業後は、大学院進学も考えるが、就職を選択する。その際に、自由であることも大事だが、どこまでの自由が許されるのかについて、障害や病気などの背景事情も踏まえながら考えを深めるために現場を知りたいとの思いで、就職先を決定していく。この頃の A さんは「ちゃんとしたい」という思いと、「ちゃんとできない」という「自由」への憧れとの間でバランスを取りながら未来を見ているようである。そして、どこまでの自由が許されるのかという問題の答えは保留し、自分の中で答えが見つけやすいと思えるところへと就職する。この一連の流れによって A さんは「人生に意味があるといいな」という人生観を獲得している。

そして、このような A さんが人生観を獲得するまでのプロセスは TEM 図によって、「第 1 期：母親の価値観を内在化している時期」「第 2 期：自分の価値観を考える時期」「第 3 期：他者との関係性の中で価値観の葛藤が起きる時期」「第 4 期：何のために生きているのかを考える時期」「第 5 期：アイデンティティを確立しながら自分の社会的な居場所を新たに見つける時期」の 5 つのステップがあることが明らかとなった。下記に TEM 図をもとに作成したストーリーラインを記述する。ここでストーリーラインの記述は、社会的方向付け(SD)を【 】、

社会的ガイド（SG）を〔 〕、必須通過点（OPP）を{ }、分岐点（BFP）を《 》、客観的事実を「 」で記すこととした。

第1期：母親の価値観を内在化している時期

幼少期は「絵を描くことが好き」な子どもだった。「絵を描くことが好き」という体験は「何かを夢中になれる」という自信を獲得することに繋がっていった。小学生の頃は「母親を内在化」して母親がいないところでも「自分がちゃんとしなきゃという気持ち」が強く、「お礼を言わない人にありがとう？と尋ねる」という行動をとっていた。また、「母親を内在化」して「怒られると思うとすぐに逃げる」こともあった。

第2期：自分の価値観を考える時期

「中学に進学」し、「遅刻する同級生を自由だと思う」ことがあった。「父との死別」を経験し、「命に限りがあるからやりたいことをやったほうがいい」と思うようになった。同じような時期に「祖母との死別」を経験し「人として従うべきことから目を背けてはいけないと気づく」。

第3期：他者との関係性の中で価値感の葛藤が起きる時期

「高校に進学する」と【進学による環境の変化】があった。周囲で人がいじめられている場面があり、「いじめをやめなよと言えない」という体験から「人としてちゃんとすべきだ」と思うようになった。しかし、「複数の教師に対する不信感」があり《この空間にいることが辛い》と思っていた。「担任の先生と母親からのフォロー」もあったが【自分の気持ちを説明する言葉がない】という感覚があり、葛藤していた。進路について「美大に進学したい」と思うようになる。「美術の先生から絵を通して気持ちを理解してもらう」という体験がある一方で、【技術でしか評価されない】ということから【本当に美術をやりたいのか？という疑問】があった。「絵の上手さで人を判断する自分に辟易する」ようになり、「美大に進みたい気持ちがなくなる」ようになった。そして「高校を卒業」した。

第4期：何のために生きているのかを考える時期

「高校を卒業」した後「予備校に通ったり、アルバイトをするがうまくいかない」という時期を過ごす。この時期から「大学に入学」するまで「何のために生きているのかを考える」ことが多かった。そのような中で《お世話になった先生から塾のアルバイトに誘われる》ことになる。「声をかけてもらったのでこれは頑張って続けよう」と思い、「塾生を見てこのまま野放しにしたら大変なことになる」という責任感が生じ、「誰かに必要とされる喜び」を味わった。塾生との関わりを通して「自分はここにいないべきかもしれないかと思う」ようになり、「塾のアルバイトに邁進する」ようになった。「自分のやりたいなという気持ち」があったところに「周りが必死なところに自分も乗っかる」という形で「大学受験に向けて勉強する」ようになる。このような経験を通じて「選択肢が広いなと感じられる」ようになり、受験に合格し「大学に入学」する。

第5期：アイデンティティを確立しながら自分の社会的な居場所を新たに見つける時期

「大学に入学」後は「いろいろなアルバイトに挑戦する」。子どもと関わる仕事で【気が合わない同僚】がいたが「子どもと過ごす時間が大事だと感じる」ことがあり「人と関わりがあることで発見があると思う」ようになる。学校に行きたくないという子どもたちと接し、「自分が嫌だと思うことを共有し合えると関係が広がっていく」のではないかと考える。また「大学の講義」を通して「その人にしかできないことがあると思う」ようになる。障害に関して「哲学や理論を学びたいという気持ち」を持ち「自分にしかできないことを探したいと思う」ようになる。「大学院の進学を検討する」が【進学先を選ぶことの難しさ】があり、実際に現場でどういうことが行われているか分からない状態で研究しても現場に行かなければと思うのではないかと考え、「実際の現場を知りたい」という気持ちから「就職活動」をすることになる。就職先を選ぶにあたり、自由なことも大事だが、どこまでの自由が許されるのか、何が健康で何が病気で何が障害なのかを考えられるところに行くことが「自分の中で答えが見つけやすいと思う」に至る。「内定をもらい就職」し、「日常の中で人生の意味を考える」ことを

通して「現在の人生観を獲得」するに至った。

（２）考察

本研究は A さんが「人生の意味があるといいな」という人生観を得るまでのプロセスを明らかにするために TEM を用いて分析をおこなった。

その結果、高校生のときにこの空間にすることが辛いと思うという体験と、高校卒業後に塾のアルバイトに誘われるという２つの体験が分岐点となっていることが明らかとなった。

分岐点１：この空間にすることが辛いと思う

A さんは死別体験によって、命に限りがあることを認識し、人として従うべきことから目を背けてはいけないという気付きを得ている。しかし、いじめを目撃して助けることができないという経験や教師に対する不信感から葛藤が生じることになる。担任や母親からのフォローを得つつも、自分の気持ちを表現することができないもどかしさを感じている。A さんは担任や母親からのフォローを手助けだと認識しているものの、自分の信念を前にした無力感との間で葛藤が起こっている。このことから A さんにとって、死別体験を経て生じた信念を現実世界の中でどのように貫いていけるかという点が、人生の中で課題となっていたと考えられる。そのため、課題に直面することになった出来事となる「この空間にすることが辛いと思う」という出来事が分岐点の一つとなっている。

このことから、人生観を獲得するうえで、自分の信念とどのように折り合いをつけていくかが重要となると考えられる。また、その信念に対峙するような出来事を経験することは、ネガティブな体験として終わらずに、その後の人生観を獲得する一つの出来事として認識される点も重要となると思われる。

分岐点２：塾のアルバイトに誘われる

A さんは高校卒業後、うまくいかないと感じている中で塾のアルバイトに誘われ、塾生と関わりを持つようになる。挨拶が出来ない、宿題を忘れてしまうといった塾生たちに「このまま野放しにしたら大変なことになる」という気持ちを持ち、「自分はここにいなきゃいけないかも」という思いになっていく。そして、塾生との関わりを通して「必要としてもらえることってありがたい」という気持ちを得るようになる。この誰かに必要としてもらえることへの感謝の気持ちが A さんの価値観を形成するうえで大きな要因となっていると考えられる。心理・社会的モラトリアムについて、この期間に個人は、自由な役割実験を通して、社会のある特定の場所に適所を見つける（Erickson, 1980 西平・中島訳（2011））と考えられている。このことから A さんは塾生との交流によって、塾という特定の居場所を見つけ、高校生までに抱いていた葛藤を社会的に適応できる形へと昇華させながらアイデンティティを確立していると考えられる。また A さんは高校卒業から大学入学までの間に、何のために生きているのかを考えるようになっていく。フランクは人生の意味を問うことに関して「病的なものではなく、むしろ真に人間的なものの最も避けがたい徴候（Frankl, 2010 広岡訳（2015）p. 64）」と述べており、何のために生きているのかを問うことは病的なものではなく、人間らしい苦悩であると考えられる。そのため、A さんが何のために生きているのかを考えたという経験は人生観を得るプロセスに寄与していると考えられる。そして A さんの場合を考えたときに、このような問いを塾生という他者との関係性の中で問い続けられたところに特徴があると思われる。社会的に孤立することなく、他者との関係性を維持しながら、自分は何ができるかという役割に目を向けられるような環境が重要であったと思われる。このことから、青年期というアイデンティティを確立していく時期に、健全に人生の意味を考えていくには、他者と関係を持ちながら自分の役割に目を向けていく必要があると考えられる。

IV. TAE による分析

（１）結果

TAE は 14 ステップから成り、大きくパートⅠ（ステップ 1 から 5）、パートⅡ（ステップ 6 から 9）、パートⅢ（ステップ 10 から 14）の 3 つに分けられている（末武ら, 2016）。小高（2019）によると、パートⅠで分析

する意味感覚の全体を大雑把に捉え、パートⅡで重要部分ごとに要点を出し部分間の関係を検討し、パートⅢで意味感覚全体の骨格を、概念（表現の要となる重要語）を配置した論理的文章として記述するとされている。本研究では末武ら（2016）による文献に基づき、分析を進めた。

パートⅠ：＜ステップ1～5：全体と中核を把握する＞

「語り手の世界の中で人生の意味を感じたいという感覚」という感覚を手がかりに、繰り返し逐語記録を読み返し、フェルトセンスが表現できるような短い区や単語を探していった。その結果、「役割」「模索」「交流」「関係」「答え」が得られた。これらの中で「関係」が特に重要だと感じられたため、フェルトセンスを感じながら浮かんできた語も用いながら仮マイセンテンス「この感じは、与えられた役割を人との関係や交流の中で見出し、人生を模索しながら自分の中で答えを見つけていくという感じである。」を得た。仮マイセンテンスの中でも筆者のフェルトセンスに照らし合わせたときに「関係」が最も重要だと感じられたのでキーワード1として選定し、辞書（山田ら，2024）で一般的な意味を調べた。調べた結果「関係」の辞書における意味は「二つ（以上）の人（組織）などの間に認められる、互いに無視することができない結びつき。」であった。フェルトセンスから感じられた独自の意味には、人との結びつき中での自分の役割を感じ、居場所を見つけて次の道へと進んでいくということが含まれていた。キーワード1のフェルトセンスの意味感覚から得られた語句の中から、「居場所」をキーワード2として選び、キーワード1と同様に辞書の意味とフェルトセンスから感じられた独自の意味を取り出していった。同様の作業をキーワード3まで行った。その結果最後に取り出された語句の中からとりわけ重要だと感じられた言葉を選び、マイセンテンスとしてフェルトセンス全体を表現する「この感じは、人との結びつきの中で、身を落ち着けて自分の役割を感じることができる。必要とされる喜びを感じながら、次に歩いていく自分の道を見つけていく。このような様子から世界を感じることができるという感じである。」という一文を得た（Table3）。

Table3 パートⅠ		
データ理解の意味感覚 (フェルトセンス)	語り手の世界の中で人生の意味を感じたいという感覚	
出てきた語	「役割」「模索」「交流」「関係」「答え」	
仮マイセンテンス	この感じは、「与えられた役割を人との関係や交流の中で見出し、人生を模索しながら自分の中で答えを見つけていく」という感じである。	
キーワード1	関係	
	辞書の意味	関係・・・二つ（以上）の人（組織）などの間に認められる、互いに無視することができない結びつき。
	フェルトセンスの意味感覚	人との結びつき中での自分の役割を感じ、居場所を見つけて次の道へと進んでいく・・・
キーワード2	居場所	
	辞書の意味	居場所・・・その人が身を落ち着けていられる場所。
	フェルトセンスの意味感覚	身を落ち着けられる場所を見つけて、必要とされる喜びを感じながら、進んでいく道を見つけていく・・・
キーワード3	必要	
	辞書の意味	必要・・・何かをするときにそのものの存在を無視しては用を成さないことを表す。
	フェルトセンスの意味感覚	存在を無視されない情緒的な交流の中で、自分の進んでいく方向を見出していく・・・
マイセンテンス	この感じは「存在を無視されない情緒的な結びつきによって、身を落ち着けていられる場所を見つけ、自分の役割を感じながら、これから進んでいく方向を見出していく」という感じである。	
マイセンテンスの説明	人との結びつきの中で、身を落ち着けて自分の役割を感じることができる。必要とされる喜びを感じながら、次に歩いていく自分の道を見つけていく。このような様子から世界を感じることができる。	

パートⅡ：＜ステップ6～9：実例からパターンを引き出す＞

パートⅡ前半：部分を順次見ていく

逐語記録から重要だと感じられた部分を実例として挙げ、それらに含まれている一般関係性を見出し、フェルトセンスの側面を立ち上げていくような一文をパターンとして表現した。その結果 30 パターンが抽出された（Table4）。

Table4 パートⅡ（前半）			
P1	人と関わることで自分について発見がある。	P16	明日死ぬかもしれないというのを繰り返してここまで来ている。
P2	人生の意味と充実感や満足感は必ずしも一致しない。	P17	今日生きるということの重みがその人によって変わってくる。
P3	自分の役割がここにいる意味になる。	P18	生きている人が納得するために不条理な死がある。
P4	自分の期待以上の出来事が得られると充実感がある。	P19	誰かを納得させるために不条理や理不尽さがある。
P5	存在意義は他の関係の中で見ていく。	P20	人生は長くないかもしれないが、同時にそんなにすぐに終わらない。
P6	人生の意味は自分から見出すもの。	P21	人間は意味付けをしあいながら生きていている。
P7	人生の意味を定義づけた時点で、自分から積極的に探しに行かないと出てこない。	P22	誰かのために人生をまっとうする瞬間が存在する。
P8	今日頑張らないといけないことを頑張るだけで、充実感が充たされる。	P23	自分をいったん置いておくことで、自分がやるべきことと向き合える。
P9	頑張れるときは、人生の意味があるのかないのかどっちつかずの状況に耐えられる。	P24	理不尽さや不条理さは物語を見出したい人達の中に浮かび上がってくる。
P10	考えているうちに頑張ろうと思えてくる。	P25	相手には相手にしか知り得ない物語がある。
P11	人は突然死ぬ。	P26	物語を亡くなった方にぶつけるのは、消費する感じがする。
P12	命に限りがあるからやりたいことをやった方が良い。	P27	人としてちゃんとすべきだと思う。
P13	他者からのフィードバックによって自分の考えの可能性が広がる。	P28	従うべきことを実現できず、目を背けて離れたところについてしまう。
P14	誰かに必要とされることでうれしい。	P29	自分が嫌だと思っていることを共有しあえることで広がっていく。
P15	その人じゃないとできないことがあると考えたとき、自分もそういうのがあったらいいなと考える。	P30	自分の中で一番答えが見つけやすい進路に進む。

パートⅡ後半：側面関係構成

取り出された全パターンを交差させた。ここでは30×29の870パターンを抽出した。そしてその中で新たな側面を表現し、とりわけ重要だと感じられた95パターンを抽出した（Table5）。

Table5 パートⅡ（後半）			
P1 × P3	人と関わることで居る意味が出る。	P9 × P4	頑張れるときは、充実感がある。
P1 × P5	人と関わることで存在意義が見えていく。	P10 × P4	考えていることに充実感がある。
P1 × P6	人と関わることで人生の意味を見出す。	P11 × P26	亡くなった人にしか分からない物語がある。
P1 × P10	人と関わることで、頑張ろうと思えてくる。	P11 × P26	突然の死が消費される。
P1 × P13	人と関わることで可能性が広がっていく。	P12 × P16	命に限りがあるが、今まで繰り返してここまで来ている。
P1 × P14	人と関わり、必要とされて嬉しい。	P12 × P17	命に限りがあることで今日という重みが人によって変わる。
P1 × P21	人と関わり意味付けし合いながら生きている。	P12 × P21	命に限りがあるなかで、意味づけ合いながら生きている。
P1 × P23	人と関わることで、自分がやるべきことと向き合える。	P12 × P22	命に限りがある中で人生をまっとうする瞬間が存在する。
P1 × P29	人と関わりで共有し合うことで広がっていく。	P12 × P23	限りある命の中で自分がやるべきことと向き合う。
P3 × P5	自分の役割が関係の中で見えてくる。	P12 × P26	命は限りがあり、消費される。
P3 × P6	自分の役割を自分から見出す。	P12 × P27	命に限りがあるからちゃんとすべきだと思う。
P3 × P9	自分の役割によってどっちつかずの状況に耐えられる。	P13 × P1	他者からのフィードバックによって自分について発見がある。
P3 × P10	自分の役割によって頑張ろうと思えてくる。	P13 × P14	他者からフィードバックによって誰かに必要とされる。
P3 × P14	自分の役割があることがうれしい。	P13 × P21	他者からのフィードバックによって意味づけ合いながら生きる。
P3 × P15	自分の役割があったらいいなと考える。	P13 × P22	他者からのフィードバックによって人生をまっとうする瞬間が存在する。
P3 × P22	自分の役割をまっとうする瞬間がある。	P13 × P29	他者からのフィードバックを共有しながら広がっていく。
P4 × P2	自分の期待以上の出来事が人生の意味とは限らない。	P14 × P1	誰かに必要とされ、自分について発見がある。
P5 × P8	自分の期待以上の出来事によって充実感が充たされる。	P14 × P3	誰かに必要とされることがここにいる意味になる。
P5 × P17	存在意義は人によって変わってくる。	P14 × P10	誰かに必要とされて頑張ろうと思える。
P6 × P7	人生の意味は自分から積極的に探しに行かないと出てこない。	P14 × P21	誰かに必要とされる中で意味付けをし合いながら生きている。
P6 × P15	人生の意味があったらいいなと考える。	P14 × P22	誰かに必要とされ人生を全うする瞬間が存在する。
P6 × P17	人生の意味は人によって変わってくる。	P14 × P23	誰かに必要とされ自分がやるべきことと向き合う。
P6 × P22	誰かのために人生の意味をまっとうする瞬間がある。	P14 × P30	誰かに必要とされ、答えを見つけやすい進路に進む。
P6 × P23	人生の意味を見出し自分がやるべきことに向き合う。	P15 × P3	その人じゃないとできないことがあるというの、そこに居る意味になる。
P7 × P6	人生の意味を定義づけた時点で、人生の意味は自分から見出す。	P15 × P21	その人じゃないとできないことをお互いに規定しながら生きている。
P7 × P13	人生の意味を定義づけ、自分の考えの可能性が広がっていく。	P15 × P22	その人じゃないとできないことを全うする瞬間が存在する。
P7 × P22	人生の意味を定義づけた時点で、人生を全うする瞬間が存在する。	P15 × P23	その人じゃないとできないことがあるとき、自分がやるべきことと向き合う。
P7 × P23	人生の意味を定義づけ、自分がやるべきことと向き合う。	P16 × P12	明日死ぬかもしれないからやりたいことをやった方が良い。
P8 × P7	今日頑張らないといけないことを頑張って、意味を自ら積極的に探しに行く。	P16 × P15	明日死ぬかもしれないが自分がしかなできないことがあったらいいと思う。
P8 × P9	今日頑張らなさいいけないことを頑張るとどっちつかずの状況に耐えられる。	P16 × P17	明日死ぬかもしれないという重みが人によって変わってくる。
P8 × P12	今日頑張らないといけないことを頑張る、やりたいことをやった方が良い。	P16 × P20	明日死ぬかもしれないが、人生そんなにすぐに終わらない。
P8 × P16	今日頑張らないといけないことを繰り返してここまで来ている。	P16 × P21	明日死ぬかもしれない中で、互いに意味づけ合いながら生きている。
P8 × P23	今日頑張らないといけないことを頑張る、自分がやるべきことと向き合う。	P16 × P22	明日死ぬかもしれない中で、人生を全うする瞬間が存在する。
		P16 × P23	明日死ぬかもしれない中で、自分がやるべきことと向き合う。
		P18 × P19	生きている人が納得するために不条理や理不尽さがある。
		P18 × P25	生きている人が納得するために理不尽さや不条理さが物語となって浮かび上がってくる。
		P18 × P26	生きている人が知らない物語がある。
		P18 × P27	生きている人が納得するために人の死が消費される。
		P19 × P18	誰かを納得させるために不条理な死がある。
		P19 × P26	誰かを納得させるために人の死が消費する。
		P21 × P1	意味付けをし合いながら自分について発見をする。
		P21 × P6	人間は互いに意味付けし合いながら自ら人生の意味を見出す。
		P21 × P13	人間は意味付けし合いながら自分の考えの可能性を広げていく。
		P21 × P14	人間は意味付けし合いながら必要とされる。
		P21 × P22	人間は意味付けし合いながら人生を全うする瞬間が存在する。
		P21 × P23	意味付けし合いながら自分がやるべきことと向き合う。
		P22 × P3	誰かのために人生をまっとうする瞬間がここにいる意味になる。
		P22 × P6	誰かのために人生をまっとうする瞬間を自分から見出す。
		P22 × P7	人生を全うする瞬間を自分から積極的に探しに行かないと出てこない。
		P22 × P14	誰かのために必要とされると嬉しい。
		P22 × P15	誰かのためにできることが自分にもあったら嬉しい。
		P22 × P18	誰かのために不条理な死がある。
		P22 × P19	誰かのために不条理さや理不尽さがある。
		P23 × P1	自分をいったん置いておくことで、自分について発見がある。
		P23 × P13	自分をいったん置いて可能性を広げていく。
		P24 × P26	理不尽さや不条理さは物語を見出したい人達の中で消費される。
		P25 × P26	相手にしか知り得ない物語を消費する。
		P26 × P18	物語を亡くなった人にぶつけるために不条理な死がある。
		P27 × P22	人として人生を全うする瞬間がある。
		P29 × P13	自分が嫌だと思っていることを共有し、考えの可能性が広がっていく。
		P11 × P15	人生の長さはわからないが、自分にしかできないことがあったらいいと思う。
		P11 × P20	人生の長さは分らないが、そんなに早く終わらないと思う。

パートⅢ：＜ステップ10～14：用語システム構築と確認＞

フェルトセンスに照らし合わせ重要だと感じられる語をタームとして3つ選定し、その3タームを相互に関係づけていった。ここではA:「必要とされること」B:「関わり」C:「物語」を3つのタームとして選定した。これらのターム間の関係性をより深く見ていくために「Aは本来Bの性質を持っている」という文に当てはめて新用語を獲得した。これらの作業を繰り返し、最初に選んだ「必要とされること」「関わり」「物語」に加えて、「役割」「安心感」「一方的」「消費」「納得」「体験」を新用語として選定した（Table6）。

Table6 パートⅢ

A:＜必要とされること＞ B:＜関わり＞ C:＜物語＞			
用語	二用語の関連を探す	二用語の深い関連を探る	新用語
AB	＜必要とされること＞は対人交流の重要な＜関わり＞である。	＜必要とされること＞が＜関わり＞に由来する性質を持つとすれば、必要とされることは他者と関わりを持つときに役割を与える。	役割
BA	＜関わり＞は人が他者から＜必要とされること＞である。	＜関わり＞が＜必要とされること＞に由来する性質を持つとすれば、関わりによって誰かに必要とされるという安心感につながる。	安心感
BC	＜関わり＞は人と人が作り出す＜物語＞である。	＜関わり＞が＜物語＞に由来する性質を持つとすれば、人との関わりの中で物語は生まれ、その物語は亡くなった人にぶつけられる。	一方的
CB	＜物語＞は人と人との間で生じる＜関わり＞である。	＜物語＞が＜関わり＞に由来する性質を持つとすれば、物語は生きている人たちの関わりの中で消費される。	消費
CA	＜物語＞は気持ちを落ち着けるために＜必要とされること＞である。	＜物語＞が＜必要とされること＞に由来する性質を持つとすれば、物語は生きている人が納得するために必要とされる。	納得
AC	＜必要とされること＞は、人が体験するあたにかい＜物語＞である。	＜必要とされること＞が＜物語＞に由来する性質を持つとすれば、必要とされるという体験は、その人にしか分らない物語である。	体験

次にこれまでの作業で得られたタームを相互に組み合わせて理論構築を行った。ここで Aさんの語りの中で「必要としてもらえることってありがたいな」「自分の役割、なんかここにいる意味、それがあるなって思えたときにももしかしたらこれが人生の意味なのかもしれないと思う」がフェルトセンスと照らし合わせて重要であると感じた。そこで恒久的なタームを O:「必要とされること」P:「役割」Q:「関わり」として選んだ。さらに R:「納得」S:「物語」を付け加えたいタームとして組み込み、理論の中核となる骨格文を作成した。これまでの作業で得られた O、P、Q、R、S のタームが組み込まれた文章の中で、最もフェルトセンスに沿って全体を表現できていると思われた「⑧人との＜関わり＞のなかで＜必要とされること＞は、ここに存在することを求められるという＜役割＞を与えられたように感じられて、とてもありがたいと思う。誰かに＜必要とされること＞は、誰かの意味として存在することから始まって、誰かのために人生を全うする瞬間になる。人々から＜必要とされること＞のなかには、理不尽や不条理というものがある。これらは＜物語＞を見出したいと願いながら生きている人が＜納得＞して生きて行くために必要なことである。」を骨格文とした (Table7)。

Table7 パートⅢ骨格文

O: 必要とされること P: 役割 Q: 関わり	
O、P、Qを使って主語を入れながら文章を作る。	①誰かに＜必要とされること＞は、ここに存在することを求めらるという＜役割＞を人との＜関わり＞の中で与えられるということ。
	②＜役割＞があることは、人との＜関わり＞のなかで誰かに＜必要とされる＞体験になる。
	③人との＜関わり＞は、＜役割＞を与えられたり＜必要とされる＞体験を生み出す。
O: 必要とされること P: 役割 Q: 関わり R: 納得	
O、P、Q、Rを使って主語を入れながら文章を作る。	④人との＜関わり＞のなかで＜必要とされること＞は、ここに存在することを求められるという＜役割＞を与えられたように感じられて、とてもありがたいと思う。人々から＜必要とされること＞のなかには、理不尽や不条理というものがある。これらは生きている人が＜納得＞して生きて行くために必要なことである。
	⑤誰かのために存在するという＜役割＞は、誰かの意味として存在することから始まり、誰かのために人生を全うする瞬間になる。このように＜役割＞は、人との＜関わり＞の中で誰かに＜必要とされる＞ということである。理不尽や不条理の＜役割＞は、誰かを＜納得＞させるというものである。
	⑥他者から＜必要とされる＞人との＜関わり＞は、誰かのために存在するという＜役割＞につながっていく。このように＜関わり＞は、理不尽や不条理を＜納得＞させるときに使われることもある。
O、P、Q、R、Sを使って主語を入れながら文章を作る。	⑦＜納得＞したいという気持ちによって理不尽や不条理がある。理不尽や不条理な死というのは、亡くなった人と遺された人との＜関わり＞のなかで、生きている人が＜納得＞して生きていくための＜役割＞を持っていて、＜必要とされること＞である。
	⑧人との＜関わり＞のなかで＜必要とされること＞は、ここに存在することを求められるという＜役割＞を与えられたように感じられて、とてもありがたいと思う。誰かに＜必要とされること＞は、誰かの意味として存在することから始まって、誰かのために人生を全うする瞬間になる。人々から＜必要とされること＞のなかには、理不尽や不条理というものがある。これらは＜物語＞を見出したいと願いながら生きている人が＜納得＞して生きて行くために必要なことである。
	⑨＜役割＞は他者との＜関わり＞のなかで生じる。誰かに＜必要とされる＞ことで与えられる＜役割＞は、ここに存在する意味を与えられたように感じられるため嬉しい。＜役割＞は理不尽な死という＜物語＞にも与えられる。この＜役割＞はこれから生きていく人が＜納得＞して生きていくために＜必要とされること＞である。
O、P、Q、R、Sを使って主語を入れながら文章を作る。	⑩誰かに＜必要とされる＞人との＜関わり＞は、誰かのために存在するという＜役割＞につながっていく。＜関わり＞は、亡くなった人と遺された人の間にもあって、理不尽な死は＜物語＞を見出したい人たちが納得して生きていくために＜必要とされること＞である。
	⑪＜納得＞したいという気持ちは、亡くなった人と遺された人の＜関わり＞の中で生じる。＜納得＞して生きていくために、不条理な死という＜物語＞を作って亡くなった人にぶつけている。この＜物語＞はこれから生きていく人が＜納得＞して生きていくための＜役割＞を担っていて人々に＜必要とされること＞である。
	⑫＜物語＞は人との＜関わり＞において＜役割＞を持っている。＜物語＞はこれから生きていく人が＜納得＞するために＜必要とされること＞で、亡くなった人に一方的にぶつけられる。

そして、逐語記録で実際に語られていた部分を骨格文に沿って文章にまとめて結果文とした。さらに結果文の意味まとまりに分割し、重要だと感じる部分を取り出し結果パターンとしてまとめた (Table8)。

Table8 結果文および結果パターン

結果文	人との関わりのなかで「必要としてもらえることってありがたいな」と思った。「自分の役割、なんかここにいる意味、それがあるなって思ったときにももしかしたらこれが人生の意味なのかもしれないと思う」。大学入学後「その人じゃないとできないこと、そういうのが結構あるのかなって思ったときに、自分もそういうのがあったらいいな」と考えるようになった。 「明日死ぬかもしれないけどっていうのを繰り返して繰り返してこまで来てる」と感じていて「明日というものの存在の重み」は人によって異なると思う。「1日が重いついていうのはやっぱり大変なんだろうなって」思うが、人の死に対して「誰かを納得させるために理不尽や不条理がある」と思っていて、「物語を見出したい人たちの中にそういう理不尽さや不条理さみたいなのが浮かび上がってくるのかな」と感じている。そのため理不尽な死や不条理さは「生きている人が生きていくために必要なこと」だが「相手には相手にしか知り得ない物語がある」と思っているため、「その人の物語が亡くなった方につけられるっていう感じ」やその人の人生を周りが「消費するみたいな感じがする」。 人間が互いに「意味付けし合いながら生きているのかなと思うと私も誰かの意味」で「もし私が死ぬことが誰かににとって何かの意味になるかもしれない」と思う。
結果パターン	・誰かに必要としてもらえることってありがたい。 ・自分の役割があると思ったときに、もしかしたら人生の意味なのかもしれないと思う。 ・明日死ぬかもしれないというのを繰り返しこまで来ている。 ・誰かを納得させるために理不尽さや不条理さがある。 ・その人にしか知り得ない物語がある。 ・人間は互いに意味付けし合いながら生きていて、私が生きていることも、死ぬことも誰かの意味になるかもしれない。

(2) 考察

Aさんが持っている「人生に意味があるといいな」という人生観についてどのような考えが内包されているのかをみていくために、TAEを用いて分析を行った。その結果、他者との関係性において「誰かに必要としてもらえることってありがたい」という気持ちがあり、「自分の役割があると思ったときに、もしかしたら人生の意味なのかもしれないと思う」というように、自分に課された役割を意識していることがうかがえた。また死生観に関して、「明日死ぬかもしれないというのを繰り返しこまで来ている」という考えを持っていて、ひとりひとは「その人にしか知り得ない物語がある」ため、一般的に理不尽や不条理だと思われる事由によって命を終えることについて、「誰かを納得させるために理不尽さや不条理さがある」と考えている。このような考えを持つAさんは「人間は互いに意味づけし合いながら生きていて、私が生きていることも、死ぬことも誰かの意味になるかもしれない」と感じている。このことからAさんの価値観には、誰かに必要とされるということと、自分に課される役割があるという意識が含まれていることがわかる。さらに、その人にしか知らない物語を持つひとりの人間が明日死ぬかもしれないという1日を繰り返して生きているという死生観によって人生観が形成されていると思われる。そのため、①誰かに必要とされるということ、②自分に課される役割があるという意識、③その人にしか知らない物語を持つひとりの人間が明日死ぬかもしれないという1日を繰り返して生きているという死生観の3点に焦点を当てて考察を行っていく。

① 誰かに必要とされるということ

Aさんは人生の意味を模索する過程で、塾生との関わりを通して「誰かに必要としてもらえることってありがたい」という気持ちを抱いている。そして、誰かに必要とされることは、誰かの意味として存在することから始まり、誰かのために人生を全うする瞬間になると捉えている。ここで、フランクフルは「人間は他の人間存在に向かうか意味に向かって自己を超越する (Frankl, 1969 広岡訳 (2015) p. 37)」と考えていた。そして、自己自身を無視し、忘れることによって全き自己になるのだと主張している (Frankl, 2005 山田監訳 (2011))。つまり、Aさんが塾生に対して「このまま野放しにしたら大変なことになる」と思い、向き合っていく姿勢は誰かのために人生を全うする瞬間に発展し、自己超越へとつながっていくと考えられる。このことから、自己の存在を他者との関係性のなかで捉え、自分の存在が誰かのためになるという考えがAさんにとって重要であると考えられる。

さらに、青年期におけるアイデンティティという側面について考えたときには、一人の人間としての機能と地位が与えられることが若者たちのアイデンティティの形成にとって重要だと言われている (Erickson, 1980 西平・中島訳 (2011))。そのため、Aさんが塾の先生という立場を獲得し、他者と関りを持てたことはアイデンティティの形成に寄与したと考えられる。

② 自分に課される役割があるという意識

Aさんは塾生との関わりにおいて「自分はここにいるべきかも」という気持ちになっている。そして「自分の役割があると思ったときに、もしかしたら人生の意味なのかもしれないと思う」という考え方をするようになる。このことから、場における役割を与えられ存在する必要性が感じられるということが現在の人生観の獲得に影響していると考えられる。ここで神谷（2004）は、「自己の存在目標をはっきりと自覚し、自分の生きている必要を確信し、その目標にむかって全力をそそいで歩いているひと（p. 36）」をもっとも生きがいを感じる人だと述べ、そのような人を「使命感に生きるひと（p. 36）」と表現している。また山田によると「人間は誰でも唯一性をもった存在であるが故に、自分にのみ課された責任があり、その責任を遂行することによってのみ生きがい成立する（山田，2006，p. 143）」という。つまり、生きがいを感じながら生きていくためには、他者との関係において自分自身に課された責任を自覚することが重要であると考えられる。Aさんは塾生との関わりにおいて自身の存在意義を感じ、塾生を正しい方向に導いていかなければいけないという責任感を感じることで生きがいを得ていたと考えられ、そのような生きがいがポジティブな人生観へとつながっていったと考えられる。

③ 死生観

Aさんは、その人にしか知らない物語を持つひとりの人間が明日死ぬかもしれないという1日を繰り返して生きていてと考え、人間は互いに意味づけし合いながら生きていて、自分の生死は誰かの意味になるかもしれないという死生観を抱いている。

まず「その人にしか知り得ない物語がある」という考えにAさんの死生観の特徴がうかがえる。理不尽だという気持ちは遺された人たちのためにあるというAさんの考えから、ひとりひとりをオリジナルの物語を持つ存在だと考えていることが推測される。またAさんは、人間は互いに意味付けしながら存在しており、自分の生死が誰かの意味になると考えている。これらのことから、ひとりひとりの人間はそれぞれが他の人とは全く異なる人間であると同時に、異なる人々に影響を与えながら存在し、それが意味となって現れるという思考が人生観に含まれていると考えられる。ここでフランクフルは「人間はその存在が唯一無二なので、それぞれの人生は唯一無二で、他の誰も繰り返すことができない（Frankl, 1969 広岡訳（2015）p. 93）」と述べており、人生の意味を充足させるうえで人生の唯一性を説いている。ここから、他者についてオリジナルの物語を持つ唯一の存在であるということを感じられることがポジティブな人生観の獲得につながると考えられる。さらにAさんの考えから、明日どうなっているかは分からないが、今日という日は昨日にとっての明日であり、その今日という日を生きられていることに目を向けることが重要なのだと考えられる。ここで、神谷（2004）は自殺をふみとどまらせるもののひとつとして、明日への好奇心を挙げており、たとえ1日でも待つという心を持つことができれば、すでに前向きな姿勢といえると語っている。つまり明日という時間が存在するのだという期待あるいは確信が、前向きな人生観に必要となると言えるだろう。

V. 総合考察

本研究は青年期女性がどのような人生観を持ち、その人生観がどのようなプロセスを経て獲得されたのかをTEMとTAEを用いて明らかにするために行われた。

その結果、「人生に意味があるといいな」という考えには、誰かに必要とされることへの感謝、自分に課されている役割があるという意識、人間は互いに意味付けし合いながら生きていてその人にしか知り得ない物語があるという死生観が内包されていることが明らかとなった。またこれらの価値観を獲得するまでに、「この空間にすることが辛いと思う」という高校生の時の経験と高校卒業後に「塾のアルバイトに誘われる」という二つの経験が分岐点としてあることが明らかとなった。高校生では、内在化した母親の価値観と、死別体験を経て新しく獲得した価値観を現実生活の中で折り合いをつけることが課題となっていたと考えられる。また高校卒業後は、何のために生きているのかを考えながら過ごしている。その中で塾のアルバイトをすることで社会と接点を持ち、居場所を見つけながら高校生で抱えた葛藤を社会的に適応できる形へと作り変えようとしている。このことから死別体験や何のために生きているのかを模索する期間といった心理的に負担がかかるような状況も、「人

生に意味があるといいな」というポジティブな人生観の獲得につながっていることが分かる。そしてこのような心理的な負担がかかる状況が重篤な精神的負担とならないためには、他者の存在が重要となると考えられる。高校生の時には母親や担任の先生からフォローがあり、高校卒業後は塾生とのやりとりから居場所を見出している。それによって、誰かに必要とされることがありがたいと感じるようになり、居場所を見つけたことで、自分に課されている役割があるという意識が芽生えていると考えられる。そして、人との関わりを通してひとりひとりにその人の物語があり、人間は互いに意味付けし合いながら生きているという死生観へとつながっていると考えられる。

以上のことから、心理的な負担がかかる状況を乗り越えてポジティブな人生観を獲得するには他者との関わりの中で自分の居場所を見つけ、他者との関係性の中で役割を実感できるようになることが重要であると考えられる。

VI. 今後の展望

本研究は青年期にあたる一人の女性によって語られた人生観を詳細に分析したものであった。ひとりひとりの人間は唯一性の存在で一度きりの人生を歩んでいるが、複数を対象に分析を行うことで、ポジティブな人生観を得るために必要となる共通の要素を見出すことができると考える。そのため今後は調査対象者を広げて分析を行っていく必要があると思料する。その結果によって、人生の意味を見出すために必要な要因を明らかにし、心理的な支援につなげていきたいと考える。この点については今後の研究課題としていきたい。

謝辞：本研究は上廣倫理財団の助成を受けて行われた。本研究の主旨を理解し快く研究に協力して下さった A さんに深謝いたします。

VII. 引用文献

- Erickson, E. H. (1980). *Identity and the Life Cycle*. W.W. Norton & Company. (エリクソン, E. H. 西平 直・中島 由恵 (訳) (2011) アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房.)
- Frankl, V. E. (1972). *Der Wille zum Sinn*. München: R. Piper GmbH & Co. KG. (フランクル, V. E. 山田 邦男 (監訳) 今井 伸和・高根 雅啓・岡本 哲雄・松田 美佳・雨宮 徹 (共訳) (2002) 意味への意志. 春秋社.)
- Frankl, V. E. (1988). *The will to meaning: foundations and applications of logotherapy*. New York: Penguin Group. (フランクル, V. E. 広岡 義之 (訳) (2015) 絶望から希望を導くために—ロゴセラピーの思想と実践—. 青土社.)
- Frankl, V. E. (2005). *Ärztliche seelsorge: Grundlagen der logotherapie und existenzanalyse*. Wien: Deuticke Im Zsolnay Verlag. (フランクル, V. E. 山田 邦男 (監訳) 岡本 哲雄・雨宮 徹・今井 伸和 (訳) (2011) 人間とは何か—実存的 精神療法—. 春秋社.)
- Frankl, V. E. (2010). *The feeling of meaninglessness: A challenge to psychotherapy and philosophy*. Milwaukee: Marquette University Press. (フランクル, V. E. 広岡 義之 (訳) (2015) 虚無感について—心理学と哲学への挑戦—. 青土社.)
- 池田琴恵・池田満 (2018) エンパワーメント評価型学校評価の導入における好調の意識の変容過程. 教育心理学研究. 66, 162-180.
- 亀田研 (2015) 青年期における生きる意味への問い経験尺度の作成. 青年心理学研究. 26 (2), 147-157.
- 神谷美恵子 (1966) 生きがいについて. みすず書房.
- 神谷美恵子 (2004) 神谷美恵子コレクション 生きがいについて. みすず書房.
- 笠原嘉 (1984) アパシー・シンドローム. 岩波書店.
- 上川多恵子 (2023) TEA の基本概念一覧. サトウタツヤ・安田裕子 (監修) 上川多恵子・宮下太陽・伊藤美智子・小澤伊久美 (編) カタログ TEA (複線経路等至性アプローチ) —図で響き合う (pp.5-10). 新曜社.
- 小高佐友里 (2019) スクールカウンセラーにとっての予防教育の意義—TAE を用いた質的分析を通して—. 法政大学大学院紀要. 83, 17-29.
- 熊野道子 (2003) 人生のプロファイルによる生きがいの 2 次元モデル. 健康心理学研究. 16 (2), 68-76.
- 草野智洋 (2012) 大学生におけるひきこもり傾向と人生の意味・目的意識との関連. カウンセリング研究. 45 (1), 11-19.
- 佐藤文子 (監修) 佐藤文子・田中弘子・斎藤俊一・山口浩・千葉征慶 (編) (1998) PIL ハンドブック 第 I 部 PIL テストの全体像と分析法. システムパブリカ.
- 塩満卓 (2022) 統合失調症の子どもとの同居解消を選択した母親の価値変容プロセス—3 名のインタビュー調査の TEM 分析から—. 佛教大学社会福祉学部論集. 18, 63-83.
- 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之 (2016) 「主観性を科学する」質的研究法入門 TAE—を中心に. 金子書房.
- 高井範子 (2000) 実存分析的視点における生き方態度の発達的研究 II—PIL と自己受容による検討—. 大阪大学教育学年報. 5, 59-70.
- 得丸さと子 (2010) ステップ式質的研究法—TAE の理論と応用—. 海鳴社.
- 安田裕子・サトウタツヤ編 (2012) TEM でわかる人生の経路. 誠信書房.

浦田悠（2013）人生の意味の心理学—実在的な問いを生むところ— 京都大学学術出版会.

山田邦男（2006）＜自分＞のありか. 世界思想社.

山田忠雄・倉持保男・上野善道・山田明雄・井上正博・笹原宏之（編）（2024）新明解国語辞典 第八版 青版 三省堂.